

ネイティブスピーカーとの 用例作り

畠山 利一



◆日本語話者と英語話者による合作

用例は語の意味・用法・使用の場面などを例証する極めて重要なものである。G 5 では必要なところに適切な用例が配置されるよう細心の注意を払った。

G 5 の用例は日本人とネイティブスピーカー（以後 NS）の共同作業で作られている。日本人が英文を作り、NS がチェックする場合と、日本人が語義・用法の説明をしてその語義・用法にふさわしい用例を NS が作る場合とがある。後者の場合、日本人の意図がうまく伝わらないと、用例としては使えないものができるが、うまく伝わると、とてもよい用例ができる。日本語による干渉がないので自然な英語になる。そのような用例が G 5 には多数入っている。例えば anyway の項には 5 例ある。そのうちの 2 例を引用する。やさしい英語で語義の用法を的確に示していると思う。

(1)(すでに述べたことを訂正・少し変更して)

少なくとも、と言うより || She was my best friend in high school. Or a good friend, anyway 彼女は高校生の時の最も仲のよい友だちだ。いや、少なくともよい友だちだった。

(2)それはそうとして、ともかく《◆細部は省略して、重要点を述べるときに用いる》|| My taxi was late so I arrived late at the airport. Anyway, I could board the airplane. タクシーが遅れて空港に着くのが遅くなった。が、ともかく飛行機には乗れた。

◆資料とネイティブスピーカーの直観

用例を作る際にはコーパス・英英辞書・文法書など種々の資料を参考にするが、資料だけに頼らず NS の意見も参考にしている。次のような場合である。spiritual の語義 1 は下のとおり。

(3)精神的な、精神(上)の ... Kyoto is my spiritual home. 京都は私の心のふるさとだ。

用例にある spiritual home を OALD⁸は「最も幸せと感じる場所、特に自国以外の国」という趣旨の説明をしている。そうすると Kyoto を使った G 5 の用例は不適切なのだろうか。NS の意見を聞くと ‘Spiritual home’ can be anywhere, but typically a city. とのこと。つまり市や町が心のふるさとになるのが典型的であるとの判断である。短い用例ではあるが、NS と慎重な議論を行った結果である。

用例に付ける注記にも NS の判断が入っている。通例 recommend は動名詞を目的語とし、不定詞を目的語にしないとみなされている。例えば、Turton and Heaton (1996: 282) は不定詞を不可として、I wouldn't recommend letting [×to let] your children watch it. を例としてあげている。G 4 にも同様の記述がある。

(4)I'd recommend studying [×to study] English. 英語を勉強しておくといいですよ。

NS はこの文を見て、studying が普通であるが、to study も不可ではないと言う。コーパスを検索すると They never recommended to take her home. のような不定詞を目的語にする文が少数ではあるが存在する。単に ×印をつけるだけで

は不十分であると考え、「《◆まれに to study とする人もあるが, studying とするのがふつう》」と注記を付けた。

用例の主語の選択制限に NS の意見を取り入れることもある。radiate ㊦ ① は G 4, G 5 でそれぞれ(5), (6)のようになっている。下線部は G 5 で変更になった部分である (以下同)。

- (5) <人> <喜びなど> をまき散らす, 発散させる… || Her face *radiated* optimism. 彼女の顔からは楽天的な様子があふれ出ていた。
 (6) <人・顔などが> <喜びなど> をまき散らす, 発散させる || She [Her face] *radiated* optimism.

LDOCE⁶でこの語義に該当する部分は if someone radiates a feeling, ... it is very easy to see that this is how they feel: *He radiated calm confidence.* となっている。someone が使われているので主語は <人> のようである。用例も <人> が主語になっている。OALD⁸など他の学習英和辞典でも同様に主語は <人> である。そうすると Her face を主語にした G 4 の用例は書き換えるべきだろうか。そこで上の G 5 用例を NS に見せて意見を聞くとどちらも OK という返事である。コーパスには Her face radiated total self-confidence. など face を主語にする文も見つかる。主語の選択制限は <人> とは限らないことが明らかになったので, G 5 に反映させた。

◆文型・連語を例示する用例

G 5 ではこれまで用例が付いていなかった重要な語義に, 可能な限り用例を付け加えている。recommend の語義 2 には次を追加した。

- (7) It is *recommended* that adults sleep around eight hours. 大人は約 8 時間寝ることが奨励されている。

語義と文型は「[It is ~ed that 節] …ということ」が奨励されている」として G 4 で既に記されていたが, 用例はなかった。この用例によって利用

者は用法をよりはっきりと知ることができるだろう。なお, この用例は文型に合うように NS が作成したものである。

連語についてもできるだけ用例で示した。G 4 trial ㊦ ① に「[犯罪などに対する] 裁判, 公判, 審理 [for]」の語義がある。連語として for を示しているが, 用例には for を使ったものはない。この語が B ランク (高校学習語) であることを考慮すると, for 句を入れておくほうが user-friendly になる。既存用例に手を入れて,

- (8) bring him to *trial* for robbery = bring him up for *trial* for robbery = put him on *trial* for robbery 彼を強盗容疑で裁判にかける

とした。

上は前置詞の連語に関するものであるが, 副詞辞についても同様の処置をした。trip ㊦ ① の語義「[…に] つまずく, つまずいて倒れる… (+ up) [on, over]」の中の「(+ up)」は副詞辞 up を伴う場合もあることを表示したものである。用例を次のように加筆した。

- (9) He *tripped* (up) over [on] a root and fell. 彼は木の根につまずいて倒れた。

このような細部にも目を向け, 追加はすべて NS によるチェックを受けている。コーパスを検索するだけではこのような表現が可能かどうかの判断は困難だったであろう。

◆おわりに

英和辞典の用例チェックは日本語話者が作った英文を NS が点検をして誤りを直すという方法が一般的ではないだろうか。G 5 では日本語話者と NS が協同して用例を作るという斬新な方法を採用することによって, 用例が自然で使いやすいものに一新された。

参考文献 Turton, N. D. and J. B. Heaton. 1996. *Longman Dictionary of Common Errors*. New Edition.

(はたけやま としかず・大阪国際大学名誉教授)